The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	越窯系青磁碗の基礎的研究 ： 器形・法量・文様と焼成法
Author(s)	盧, 柔君
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2017, 51, p. 81-108
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

越窯系青磁碗の基礎的研究

――器形・法量・文様と焼成法――

盧　　柔君

キーワード：貿易陶磁／型式学的分類／晩唐・呉越・北宋

一　はじめに

陶磁器の生産体制や流通構造は、貿易主体やそれぞれの国家的な施策の変革とも不可分であり、文化・社会面の動向に応じても変化する。本稿では、貿易陶磁器の様相から、その歴史、文化的な背景を追究する前提として、基礎的な分類などの再検討を試みることにしたい。

9世紀から11世紀中葉頃において日本に輸入された越窯系[1)]青磁碗は、従来から邢窯系白磁、長沙窯系釉陶と合わせ、初期貿易陶磁器として広く認識されている。初期貿易陶磁器は、国際貿易品としてアジア・アフリカの広域に流通していたが、日本においては輸入量が少なく、希少性が維持されていたので、奢侈品の性格を持つ高級食膳具とされている。

初期貿易陶磁器に関する研究は、日本国内の各地域または各時期による数量比率、とりわけ精製品と粗製品の分布からみた受容構造などの論点が重視されてきた（亀井1983、土橋1993）。しかし、初期貿易陶磁器には質的な精粗差以外に、多様な器形差も認められる。器形は特定の機能に対応するだけではなく、その外見的な要素が文化的な好みをも反映している。それらの側面の検討は、これまでの研究では必ずしも十分ではなかったため、以下ではまず器形による分類を新たに組み立てることにした。

二　型式分類の現況と新分類の方向性

従来の各分類案の概要とその課題については、別稿で詳しく述べたので（盧2017）、ここではごく簡単にまとめる。これまでの分類案は、研究者の追究課題に応じたものだが、研究材料の制約に伴う便宜的な側面も存在した。その点はやむないにしても、既往の分類案では大分類・中分類・小分類というような階層的な体系からみると、分類細目の識別基準が異なるために一意的に分類が定まらないことや、着目する視点が限られることが、問題点として指摘できる。

まず、日本における型式分類では、精・粗製品の差や産地差を明確化するため、青磁の施釉方法と胎土の質を中心として分類を行うのが基本的な原則である（亀井1975、横田・森田1978、森田1979、森田1982、池崎・森本1983、土橋1993、田中1994、山本2000）。たしかに、それらの分類案は精粗差、産地差、年代観の解明に有効な成果をあげた。しかし、口縁部形態・体部形状といった要素は重視されていなかった。機能差や意匠差を探り、分布状況などを加味して日本に好まれた機能やデザインを分析するためには、全体器形を重視する分類案を新たに組み立てる必要がある。

一方、中国の発掘調査報告における分類に関する論述（浙文研ほか2001・2002）や台湾の康才媛氏（2011）、日本の森達也氏（2015）は体部形状を重視する分類案や編年案を提出したが、型式細分が不足している点や、分類の基準が不明確である点などの課題も残されている。

本論では、初期貿易陶磁のうち最も数の多い越窯系青磁碗を例として、機能やデザインに関わると考えられる体部形状、口縁部形態、および生産地と編年を表現しやすい高台形態などで分類することを基本方針とし、全体的な器形に対する視点から、型式の再編を行うことにする。

三　碗・皿・坏の器種区分

越窯系の碗と皿[2)]の分類方式にはバリエーションがあり、また碗や皿と近似性をもつ坏を分類する認定基準も多様なので、本論文でどのように碗・皿と坏を扱うのかを最初に言及したい。まず、同器形で異名が付けられたものを器形別にまとめた図1を参照しながら、現行分類の問題点を明らかにする。

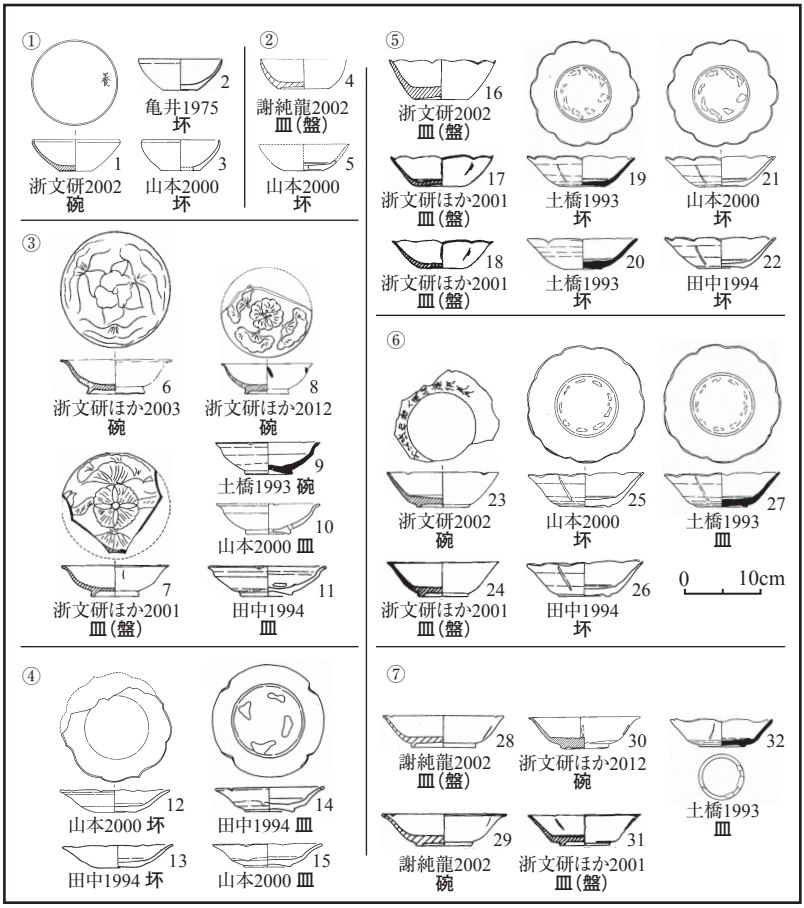


図1　碗・皿・坏の区分例

坏の分類に関する問題は、中国と日本の学術的な伝統の違いによって生まれた差や、研究者による把握の差異が認められる。坏の器形について明確に述べられている分類案は少なくない（亀井1975、横田・森田1978、森田1982、土橋1993、田中1994、山本2000）。それらの研究で共通することは、坏が平底や碁笥底で、器壁が斜め方向に立ち上がり、口縁部に近いところから内湾あるいは外反する器形として分類されている点である。しかし、中国での研究においては、上記の器形を一器種として独立させずに、碗か皿に区分するのが通例である（浙文研ほか2001、2002）。各国での器名の慣例や学術的な伝統によって生まれた差異がうかがえる。

具体的にみると、①類は器身がやや高く、平底でかつ器壁が直線的に斜め方向に伸び、口縁部で内湾するもので、中国（1）では碗とされるが、日本（2、3）では一般に坏と認識されている。器身がやや低く、碁笥底をもつ直口の②類は、中国（4）では皿、日本（5）では坏と認識される。⑤類は低い器身を持ち、より大型で、輪花をもち、中国（16～18）では皿、日本（19～22）では坏と認識される。

以上のように中国と日本の器形に対する認識差が認められるが、同じ学術伝統をもつ研究者の間でも呼称差が存在する。例えば⑤類に高台を足した⑥類は、中国で碗とされる場合（23、24）と、皿とされる場合（24）がある。一方、日本では⑥類を高台の有無を問わずに⑤類と同様に坏とする場合（25、26）がほとんどであるが、土橋氏（27）は高台があるため皿に帰属させている。しかし、④類の腰折れの器形の場合では、田中氏（1994）と山本氏（2000）は土橋氏（1993）と同様に、高台の有無によって坏（12、13）と皿（14、15）に区分している。つまり、同じ日本国内でも、高台の有無をめぐり坏と皿の分類方式に不統一が生じている。

また、⑥類に見られる中国での碗と皿に対する認識差が、③類と⑦類にも認められる。③類は器身が低く、器壁が内湾しつつ立ち上がり、体部中位で屈曲させ、口縁部で急な角度で外反させるものである。そのうち、6～8は中国窯跡の出土資料であるが、6と8は碗と区分される一方で、7は皿と認識

されている。一方、土橋氏は日本で出土した7の同形品（9）を碗としているが、山本氏（10）と田中氏（11）は皿と区分した。⑦類は底部が平たくて低い外反する器で、分類上では③類と似た状況がうかがえる。

以上の例を見ると、碗と皿の区分は研究者の主観によるところが大きく、客観的な基準が設けられていないことがわかる。それぞれの器について、かつての名称や機能を明確にできていない現状において、その呼称は現代の器に引き付けて比定されるが、当時の器の区分は今後の詳細な検討を要する。ただ、研究者間で認識を共有するためにも、やや便宜的にはならざるを得ないが、本論文では以下のように椀皿類の分類基準をあげることにしたい。

器の内底部の平坦部が底径よりも広がり、しかも立ち上がり角度が22度以上のものを碗とする。一方、日本において、高台の有無に関わらず、一律に坏に分類する場合もいれば、高台の付くものを皿に分類する場合もある。高台の有無によって機能も異なるとは判断できないため、坏という分類を独立させず、上述の区分基準によって碗や皿に入れる方向で進めたい。[3)]

四　青磁碗の型式分類

ここでは、上林湖窯跡群からの表面採集資料（謝2002）を参照しながら、発掘調査が行われた越窯窯跡群の石馬弄窯跡（浙文研ほか2001）、寺龍口窯跡（浙文研ほか2002）、荷花芯窯跡（浙文研ほか2003）、および越窯系と認識されている永嘉龍下窯跡（浙文研ほか2012）、消費地の寧波和義路遺跡（寧文研1997）、紀年墓における出土資料を用い、体部形態を重視する型式分類を行った。以下では主要な分類基準を説明し、各型式の独自な特徴を補足する。

基本的な概念としては階層的な分類枠組みを設け、大分類・中分類に個別に単一要素を採択し、分類基準を設定する（図2）。体部形状は基本的に容量などの要素と深く関わり、用途や外見に対する影響が強いため、大分類の基準とした。また体部形状が同様であっても、口縁部形態によってイメージが変わるほか、内容物の収納や取り出への適性などの機能性に関わるため、

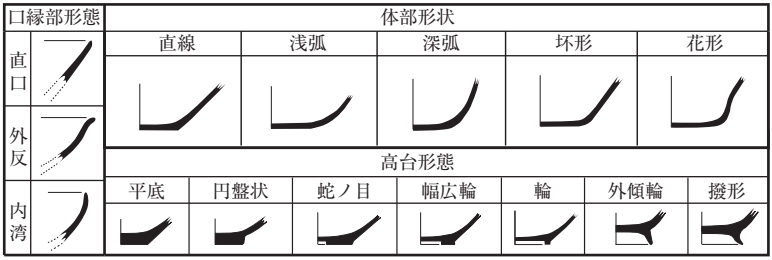


図 2　主要の分類要素模式図

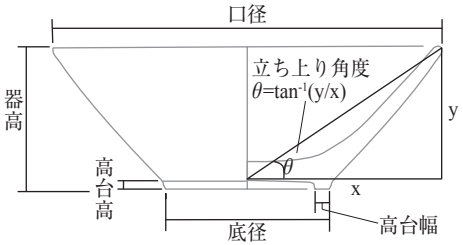


図 3　属性計測部模式図

口縁部形態を中分類の基準とした。

体部形状は、直線類（A類）とその大型のもの（A’類）、浅弧類（B類）、深弧類（C類）とその大型品（C’類）、坏形類（D類）、花形類（E類）に分ける。また、口縁形態は直口（a）や外反（b）、内湾（c）に判断する。中分類以降にはいくつかの細分類型に区分できるが、中分類で同型に属すものは体部形状と口縁部形状から整体形状が一致し、同じ意匠で作られた親縁関係がうかがえる。このような類似する意匠で作り出されたものは包括的に論じられるべきであり、中分類までは「型」として認識する。

さらに、出土資料の層位などにより年代的な変遷を検討すると、同じ型の中で、法量あるいは全体の細部形態や高台形状が時期によって変わっていくことが認められる。一つの型に現れる一連的な変化は漸進的とはいえ、一定期間にまとまりが取れるため、年代観を表す「式」に分け、小分類に相当するものとした。型式の表記方法は図4を参照されたい。例えば共通して直線直口をもちながら、それぞれ蛇ノ目高台と幅広輪高台、輪高台を持つものを、一括して「A-a型」と表記する。同じ類型では時代が下るとともに共通する変化がうかがえ、同じ類型内の形態変遷を「A-a型1式」のように、型の後に数字を付記して式で表現する。

小分類の分類基準としては法量の特徴や高台形態に着目していくが、法量の計測位置については図3に提示する通りである。その結果は、図5・6に示した。また、高台形態は図2で示すように、大別すると平底・円盤高台・蛇ノ目高台・幅広輪高台・輪高台・外傾輪高台・撥形高台といったバリエーションが認められる。それらの分類方法によって得られた越窯系青磁碗の型式について、図4を参考にしながら、以下でその特徴を説明する。

A類　A類は器壁が高台と底部の境から斜めに直上して口縁部に至るもので、概ね一直線に見える。直口のA-a型に分類される。

A-a型1式は、いわゆる蛇ノ目高台碗（亀井2014、森2015）、山本編年のI-1類に相当する。真っ直ぐの体部で、口径が広がり器高も低い扁平な形状をなし、口径対器高が3以上を示す（図5－①）。2式は器壁がやや丸みを持ち、器高が1式より高い。立ち上がり角度は32度になり（図5－②）、口径対器高比も3以下に下がる。3式では立ち上がり角度は2式と変わらないが、底径が一段と縮小したため、底径対器高比が2式より低く、1以下になる一方、口径対底径比は2.5以上に上がった（図5－①）。4式では口径が広くなったため、口径対器高比が2.8以上に戻り、口径対底径比も3.3まで上がった（図5－①）。一方、立ち上がり角度は32度に下がり、1式と2、3式の間に収まる（図5－②）。

1式では幅広輪高台や輪高台も共存しているが、蛇ノ目高台の割合が圧倒的に多い。2式から蛇ノ目高台がほぼ見えなくなる一方、幅広輪高台と輪高台が半分ずつ認められる。また、3式で輪高台、4式で外傾輪高台に一本化した傾向がうかがえる。ただし、同じ輪高台であっても、3式の輪高台は1・2式より低くて小さい形態を呈している。

A‘類　A‘類はA類の形態との相似性が高いが、すべてが口径18cm以上の大型品で、器壁にやや丸みを持つものも含まれている。釉薬の塗布が基本的に薄いので、胎土器面にあるケズリやナデ調整痕が確認でき、削り出し高台の周りにあるケズリ痕がやや粗雑であることがうかがえる。口縁部形態によって直口のA’-a型と外反のA’-bに分類される。

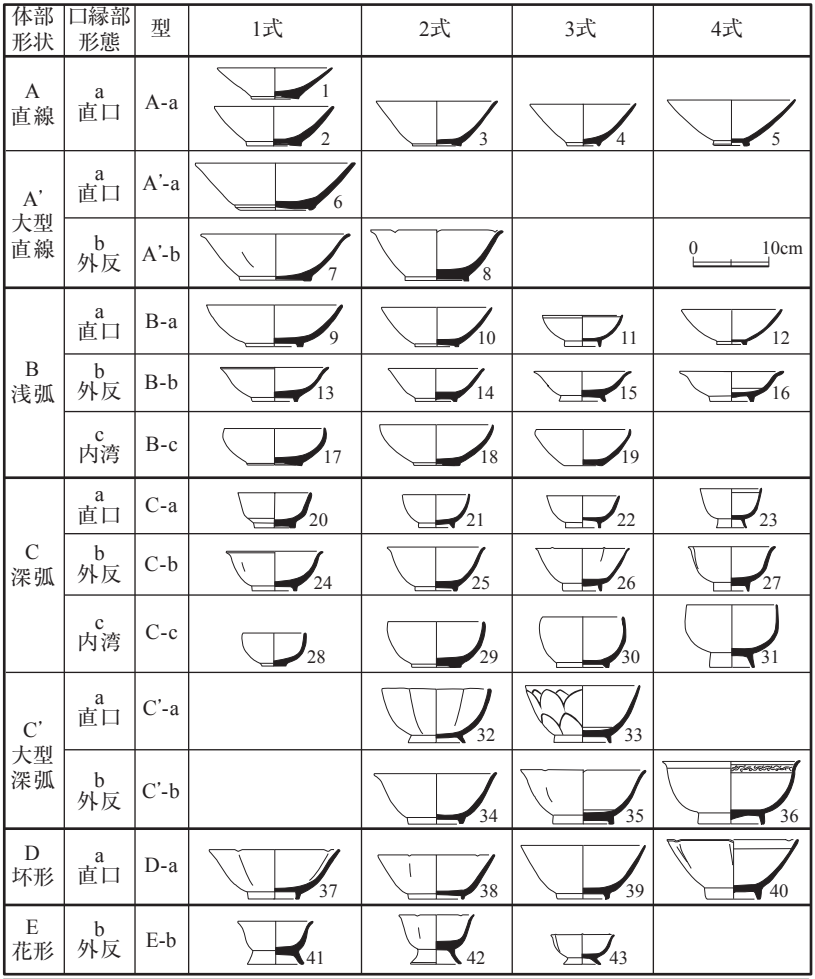
A'-a型1式はA-a型1式と形の近似性は、3～3.7の口径対器高比、1.3～1.8の底径対器高比で、2～2.5cmの口径対底径比、26～32度の立ち上がり角度で、A-a型1式と重なっている（図5－①②）。A'-b型1式は、口径対器高比が2.9～3.7、底径対器高比が1.3～2、立ち上がり角度が26～32度の間にあり、A-a型1式、A'-a型1式の分布範囲とも重なっているが、口径対底径比がより集中し、1.9～2.1の間に収まる。（図5－③）。A'-a型は1式のみで、A'-b型は1・2式がある。A'-b型2式は底径が縮小し、口径対底径比は2～2.5でやや高くなり、高くなる器高は器壁35度の立ち上がり角度に反映され、時期による形状変化の方向性がA-a型と近似する。

A'-a型とA'-b型の高台はどちらも幅広輪高台と輪高台が認められるが、A'-b型2式の輪高台は明らかに1式より細長い。

B類　　B類は体部が弧状を呈し、浅い浅弧碗であり、B-a直口碗、B-b外反碗、B-c内湾碗に分類される。

B-a型碗1式は広い口径と低い器高で、口径対器高比が3.3～3.7となり、図5－④において右寄りの位置に現れる。高台はすべて平底や円盤状高台、蛇ノ目高台、幅広輪高台、輪高台のような低い種類で、高台高対器高比は0.07～0.10である。2式は口径が狭くなり、口径対器高比が2.6～3.1で、器壁の立ち上がり角度が1式の27～29度から29～37度まで増大する。2式では平底、円盤状高台、蛇ノ目高台が消滅するが、幅広輪高台と輪高台の高台高は低いままである。3式からは身部がまた扁平化する。高台はやや高い外傾輪高台に入れ替わり、全体器高は1、2式と変わらないが、高台高対器高比0.17～0.18から1式、2式とは区別できる（図5－④）。

B-b型は外反口縁を持つ浅い弧状碗であり、A'-b型との類似性は26～30度の立ち上がり角度や口径対底径比1.9～2.6の数値（図6－⑤）で現れるが、サイズ的にはより小さく、口径16cm以下のものにあたる（図6－⑥）。釉薬が厚く施され、全体に光沢感がある質の良いものが多い。B-b型は四式に分けるが、器の扁平さは1式から4式までほとんど変わらず、口径対器高が3～3.5（図5－⑤）で、器壁立ち上がり角度が26～30（図5－⑥）の範囲に



以下出典より再トレース

1, 3, 7-11, 13, 15-18, 21-24, 26-27, 34, 38-39, 41-42：上林湖窯跡（謝2002）
2, 30, 35：石馬弄窯跡（浙文研ほか2004）
4, 14, 19, 25, 31, 33, 40, 43：寺龍口窯跡（浙文研ほか2002）
5, 44：遼韓佚墓（黄秀純、傅公鉞1984）
6：浙江永嘉龍下窯跡（浙文研ほか2012）
12：遼陳國公主墓（内文研1987）
20：和義路遺跡（寧文研1997）
28：江蘇鎮江唐墓（鎮江博物館1985）
29：荷花芯窯跡（浙文研ほか2003）
32：呉越国康陵（杭文所ほか2000）
37：洛陽後梁高繼蟾墓（洛陽市文物工作隊1995）

図4　越州窯系青磁碗分類図（S＝1/10）

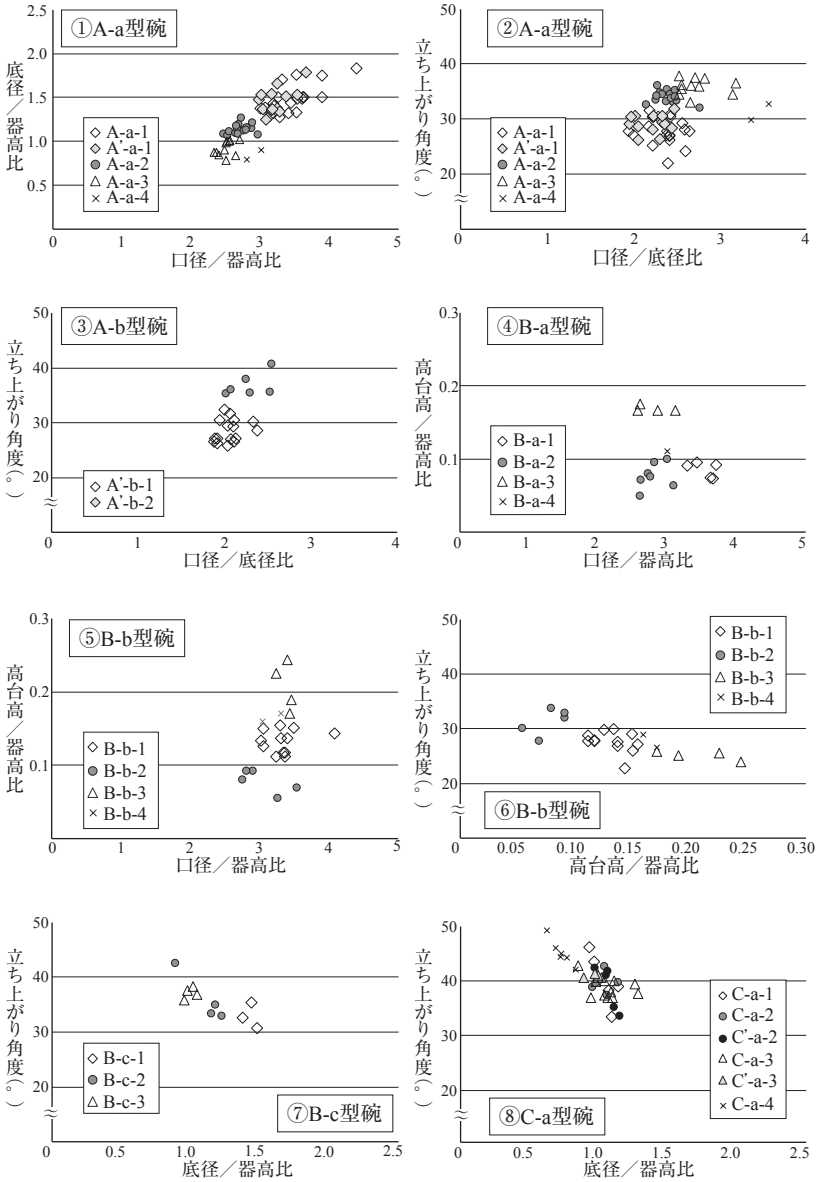


図 5　越窯系青磁碗の属性変遷（1）

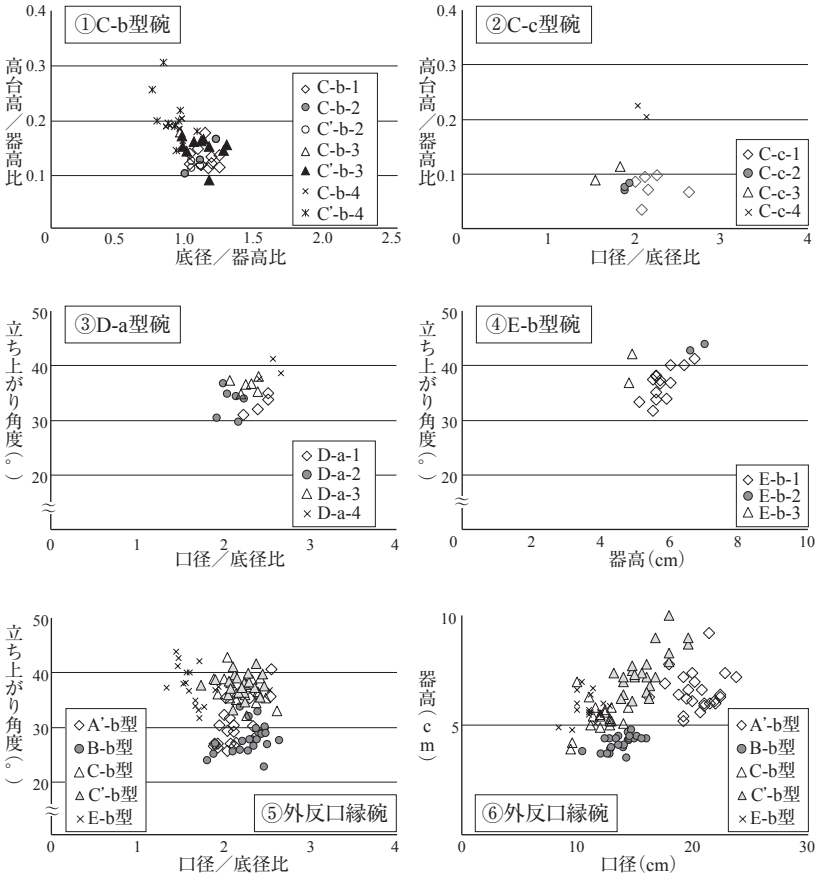


図６　越窯系青磁碗の属性変遷（2）

収まる。一方、高台高対器高の数値については、1式の蛇の目高台、輪高台、外傾輪高台で0.11～0.15、2式の輪高台でやや低い0.05～0.09になり、3式で器高が同様に変わらないが、高台が外傾輪高台になるとともに高さが急増し、0.17～0.24まで高くなった（図5－⑤）。また、4式は数値的な特徴が認められないが、口縁部の外反し始める返折点がより低く、角度の大きい外反が認められると同時に、削りの粗略化により高台内部の中心に盛り上がりができ、平坦面にならないところが4式のみの特徴である。

B-c型は口縁形状が内湾する浅弧碗である。口縁部の内湾の程度および底径の変化から1～3式に分けられる。1式は体部中位から内湾し始め、口縁部が内湾するもので、広い底径が1.4～1.5の底径対器高比に反映される（図5－⑦）。2式は内湾し始める転換点が高くなり、口縁部が体部より内傾する内湾口縁が認められるが、やや上方指向で伸びるタイプに転換し、底部も狭くなって1.1～1.2の底径対器高比になる。3式は器壁が斜めに立ち上がってから口縁端部だけで内反りに唇部を折り曲げ、かつ口縁で稜線に近い反折線をもち、底径は更に狭く、底径対器高比で1ぐらいに集中する。1～2式では蛇ノ目高台のものがほとんどだが、3式になると平底に転換した。

C類　　C類の深弧碗も口縁形態によって三つに分類した。

C-a型は直口で深い身部を持つ碗で、1式から3式までは法量上にはみえない微細な体部形状変化のみだが、4式になると法量上では明確な変化が見受けられる。1式は幅広輪高台や輪高台を持ち、体部下位の折り曲げる部分で明確な曲折がみられる碗である。2式ではその湾曲点が変わって緩やかな曲線になる。半円形に近い器形で器壁の丸みが顕著であり、高台形態も輪高台と外傾輪高台に変わった。3式は腰折れ部の曲折が1式のように再び強くなる。また、2式の高台形態に撥形高台が加えられ、内面の見込みと口縁内側に沈線をめぐらせる例が多くなった。4式は器壁を折り曲げるポイントが体部下位に下がり、器壁が直線指向に変わるが、底部が強い丸みを持つようになる。器壁の立ち上がり角度は1～3式の34°～44°から44°以上に急増し、狭くなる底径は0.6～0.8の底径対器高比に確認できる（図5－⑧）。また高台形態はすべて撥形高台に転換した。 C-a型碗の高台は金属器を真似たような細長いものが多く、また撥形高台もかなり存在することから、強い金属器志向がうかがえる印象を受けた。

C-b型は外反口縁を持つ深い碗で、文様と輪花の装飾が施される全面施釉の精緻品が殆どである。また、丸みをもって立ち上がり、体部中位で屈曲して外反する器壁もB-b型と類似し、より器高が低い同型碗といえる。1式は輪高台と外傾輪高台を持ち、体部の膨らみが明瞭で、外反口縁が縁端部だけ

大きく曲折する。2式からは輪高台碗のみで、器高が高くなるが、底径も広くなるため、底径対器高比は1式と区別できない（図6－①）。体部の膨らみが弱まり、端部の外反口縁がやや下の位置から反り始め、緩やかなものに変わっている。3式でも底径対器高比が1式、2式と変わらないが、C-a型3式のように腰折れ部の曲折は強くなり、また口縁の外反起点は更に下がり、端部の外反の程度が著しくなる特徴が確認できる。また、3式には輪高台と外傾輪高台があり、高台が細長くなったため、高台高対器高比は1、2式の0.10～0.15から0.14～0.19になった（図6－①）。4式も輪高台と外傾輪高台があるが、より高くなるため高台高対器高は0.19～0.31となった。体部が腰折れの曲折で膨らみ、器高がさらに高くなるため、底径対器高比は1～3式の0.9～1.3より一段と減少し、0.7～0.9となった（図6－①）。また、B-b型4式と同様に高台内部の中心に突出が認められるのが特徴である。

C-c型は内湾口縁をもつ深い碗で、体部中位の膨らみがかなり強く、全体が円形に見える。1式は円盤状高台と幅広輪高台があり、底径が狭く、口径対底径比が2以上である。2式は底径が広くなり、口径対底径比が1.9である（図6－②）。3式は輪高台に転換し、体部中位から内湾し始め、球体のような体部形状をもつ。底径がさらに広く、底径対器高比が1.5～1.8に下がった（図6－②）。4式の口縁形態は内湾というより、むしろ内傾と呼称したほうが相応しい。器壁は底部から丸みを持ちながら立ち上がるが、体部中位から方向を転換し、内側へ斜め上に伸びていく。底径は1式と同様に狭い高台が遥かに高くなり、0.2以上の高台高対器高比（図6－②）が認められる。

C’類　C‘類はC類の形態と一致するが、すべてが口径16cm以上の大型品である。口縁部形態によって直口のC’-a型と外反のC’-b型に分類される。C’-a型にはC-a型2式と3式に相当するものが現れるが、C’-b型にはC-b型2式、3式、4式に相当するものが認められる。形態の特徴と法量の変化傾向はそれぞれ対応するC類の型式と一致する。

D類　D類は現時点では直口のD-a型碗だけを含み、器壁が底部から横に少々広がってから、急に曲折して45度程度斜め上方向に直線的に伸びる碗

で、全体が逆台形を呈す。器壁の角度はA-a型碗と類似するが、底部が平坦で、腰折れが明瞭であり、高台径が小さく、日本において「坏」や「皿」と認識された場合もある碗である（図1の⑥類）。1式は器壁がやや丸みを持ちつつ立ち上がるものである。底径は2式と変わらないが、口径がより広く点は、2.2～2.5の口径対底径比に反映される（図6－③）。2式では口径対底径比が1.9～2.2で1式と区別できる以外、器壁はより直線的になる特徴も確認できる。3式では底径が狭くなり、高い器高をもつため、立ち上がり角度が1・2式の30°～37°から35°～38°に分布範囲はやや上回る。4式の立ち上がり角度は更に3式より大きく、35～38度から38～41度まで上がる（図6－③）。装飾があまりなく、輪花碗および文様が施されたものが少ない。

E類　　E類は底部から外反しながら立ち上がる器壁を持つ碗であり、現時点では外反口縁を持つものを認めているため、E-b型から設定した。E-b型碗は山本編年の小碗Ⅲ-1に当たるもので、多くが文様をもつ輪花装飾碗である。他の類型の碗が持つ高台がほとんど削り出し高台である一方、この類型は貼り付ける撥形高台や外傾輪高台を中心とするのが特徴的である。E-b型は1式の時代に最も盛んに生産されたが、その後の生産量は一気に減少し、3式で終焉を迎えた。1式は立ち上がり角度が主に32度から43度までの範囲内にある（図6－④）。2式になると口径が狭くなるとともに、立ち上がり角度が43度以上に変わる（図6－④）。3式では形態が比較的扁平な1式に類似するが、法量的に小型のものとなる（図6－④）。

以上、各型式分類の概要を示したが、一類型内の1～4式の間の形態差は、時代の流れに伴う型式変化と理解している。また、中国の紀年墓と消費遺跡の層位関係から分析した結果によって、各型に同じ数字をつけたものは、開始・終結時期に20年前後のズレが生じたとしても、ほぼ同時代に流行していたことがわかった。紙数の制限もあり、ここでは各型式の年代観などについて詳しく論じないが、結論だけを示すと、1式は9世紀、2式は10世紀前葉、3式は10世紀後葉、4式は11世紀前葉に概ね流行していたものである。前述の通り、各類型において、属性ごとに異なる変化が認められるが、全体的に

は時代が下ると器高が高くなる傾向がうかがえる。高台に関しても、削り出す蛇ノ目高台や輪高台を中心とする段階から、外傾輪高台と撥形高台を主とする段階へと変化し、高台が幅狭く高くなる。

五　装飾技法と型式の対応性

(1)　文様の多様性

以下では、さらに装飾技法及び窯詰め方法などを検討し、生産コストの観点から各型式について評価を与えてみる。[4] まずは、装飾を取り上げる。

越窯系青磁碗の文様は各段階において異なっている（図7）。各類型の1式碗ではモチーフがかなり収斂しており、ほとんどの文様は「蓮」と深く関係する。特に蓮花や蓮葉の組み合わせ、並べ替えだけで、蓮葉花文、蓮葉文、および蓮花文のシリーズになり、いくつかの変化がうかがえる。モチーフが同様に蓮花であっても、蓮葉花文2は環状の蓮葉が蓮葉花文1の書き方と差があり、全体の筆画もより簡略化し、蓮葉花文3は中央の花文が1の変形になる。蓮葉文は蓮葉花文1が蓮花を省略したもので、蓮花文1と2は蓮葉花文1と2が蓮葉を省略したもの。独自の風格をもつ各々の変形文は異なる型式に対応している。例えば、蓮葉花文1は主に大型のA'-a型とA'-b型にあり、それより構図が複雑な蓮葉花文2は小型のB-b型、C-b型碗にあり、蓮葉花文3はC-a型とC-b型だけで確認できる。蓮葉文はB-b型に専属する。蓮花文1と蓮花文2はほぼE-b型専属し、C-c型に現れるのが一例だけである。また、B-b型はA'-a型碗、A'-b型碗と同じ蓮葉花文1をもつが、後両者の筆画が多少簡略化したものである。また、蓮葉花文2でC-b型と共通するが、今度はC-b型のほうが外弁と環状の蓮葉を明瞭に描く点で異なっている。B-b型以外、一型式が採用した文様も普通に2種類以上に越えなく、型式と文様の対応関係が認められる。

2式碗では文様が激減し、文様碗があまり見当たらない。3式では文様が一新され、4式と強い繋がっている他、型式間で横断的共通性も見られるよ

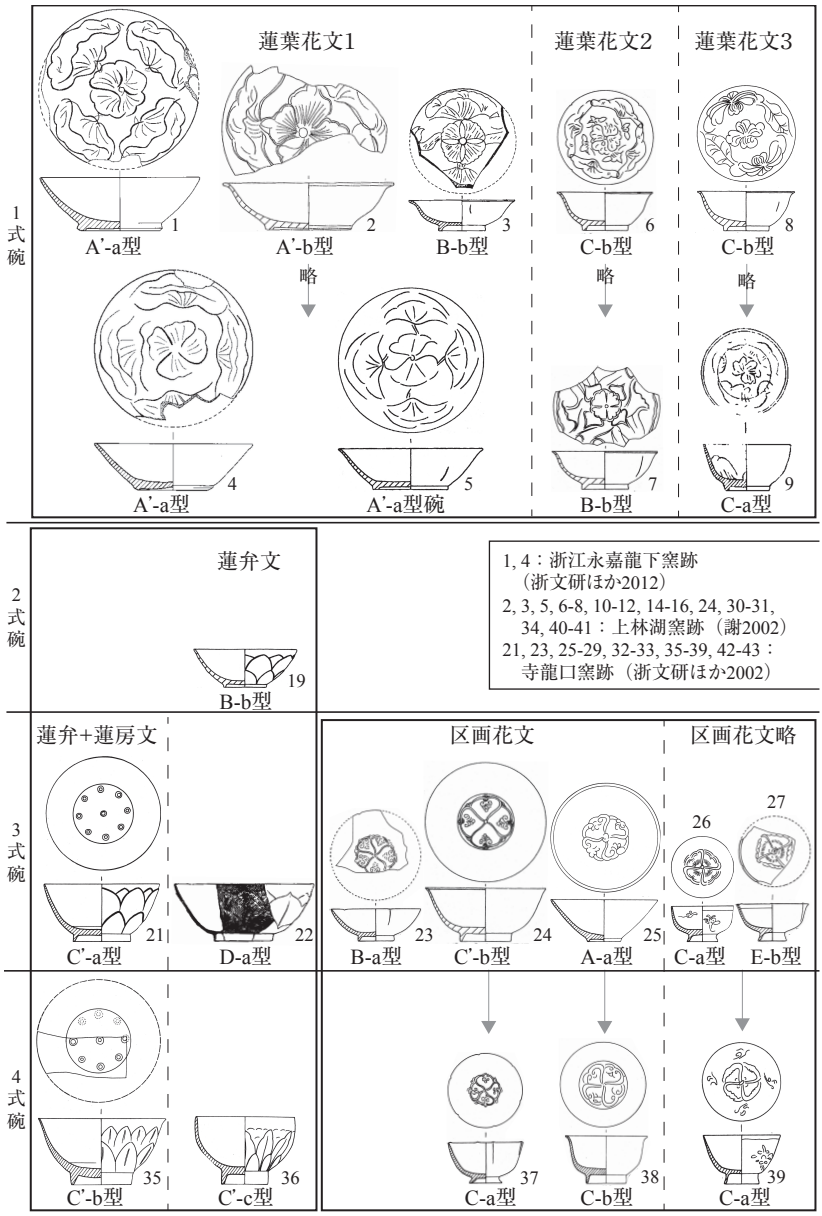
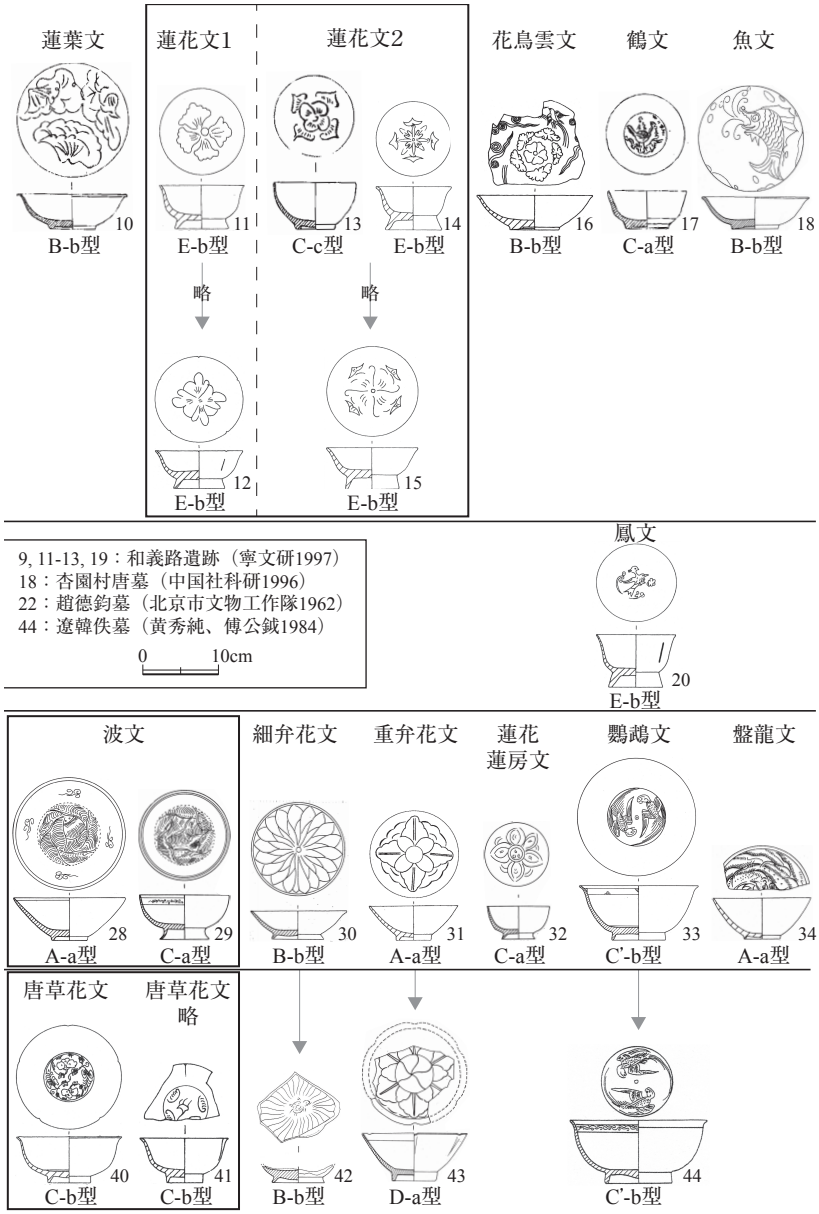


図 7　越窯系青磁碗における主な文様（S＝1/10）（右頁同）


蓮葉文
蓮花文1
蓮花文2
花鳥雲文
鶴文
魚文
10
B-b型
11
E-b型
13
C-c型
14
E-b型
16
B-b型
17
C-a型
18
B-b型
略
略
12
E-b型
15
E-b型
9, 11-13, 19：和義路遺跡（寧文研1997）
18：杏園村唐墓（中国社科研1996）
22：趙德鈞墓（北京市文物工作隊1962）
44：遼韓佚墓（黄秀純、傅公鉞1984）
0 10cm
鳳文
20
E-b型
波文
細弁花文
重弁花文
蓮花
蓮房文
鸚鵡文
盤龍文
28
A-a型
29
C-a型
30
B-b型
31
A-a型
32
C-a型
33
C'-b型
34
A-a型
唐草花文
唐草花文
略
40
C-b型
41
C-b型
42
B-b型
43
D-a型
44
C'-b型

うになった。併せてみると、最も普遍的であるのは区画花文で、区画花文とその略したもの（図7：23－27、37－39）はA-a型、B-a型、C-a型、C'-a型、C-b型、C'-b型、E-b型碗に、器壁外面に書かれた蓮弁文（図7：22－23、35－36）はC'-a型、D-a型、C'-b型、C'-c型に、波文（図7：28－29）はA-a型とC-a型にそれぞれ共通してみられる。また、同じ花というモチーフを持つのはA-a型の重弁花文、B-b型の細弁花文、C-a型の蓮花蓮房文、C-b型の唐草花文があげられる。しかし、A-a型の盤龍文とC'-b型の鸚鵡文など全く異なるモチーフの文様も認められ、これらの文様はすべて型式ごとに特有のものになる。3、4式碗は多型式の間を渡る共通性が強調される一方、型式を越えない独特な文様も多い。1式においては一型式で一、二種類の文様のみ現れる状況から一転し、3・4式においては一型式で文様のバラエティーも生み出される。

(2)　文様と輪花装飾の割合から見た各型式の特徴

文様の質的な差のほかに、量にも目を向けると、各類型の外反口縁碗とA'-a型碗、C-a型碗、C'-a型碗は基本的に通時的に文様が施される一方、B-c型碗は一貫して無文である。A-a型、B-a型、D-a型碗は、1式においては無文であるが、B-a型は2式から、A-a型とD-a型は3式から、有文碗の段階的な増加が認められる（図9）。また、文様が普遍に多く施される型式には、2式において文様碗の激減が認められる。E-b型は資料が少ないため除外して論じると、C-a型が20％ぐらいの文様碗が維持できる以外、すべての型式に文様碗は占める割合は10％以下になった。

次に輪花の割合を算出すると、ほとんどの類型で輪花技法を施したものが多少あるが、特にA'-b型、C-a型、C'-a型、C-b型、C'-b型、D-a型、E-b型に多い。一方、B-a型は2式以降に多くなり、B-b型は2式以降になくなるのは変化が認められる型式である。A-a型、A'-a型は基本的に輪花碗が少ないタイプで、さらに極端な例としては輪花が全く施さないともいえるB-c型、C-c型碗はあげられる。しかし、A-a型、B-a型とC-c型の中、2式だけは輪

花碗が突如として大量に出現した現象が認められる。各型式の状況を併せてみると、輪花装飾を普遍に施す型式も、2式碗において割合の維持や増加が認められる（図10）。すなわち、A-a型などの碗は2式における輪花装飾の急増は、青磁碗全体の傾向といえる。

輪花と文様の装飾状況を合わせて考えると、B-c型とC-c型碗は装飾をほとんど加えない素朴な碗であり、A-a型碗とB-a型碗は初期においては素朴な碗であったが、2式から輪花や文様を加えるようになる。A'-a型は文様が多く、輪花が少ないに対して、A'-b型碗とD-a型碗は輪花が多く、文様が少ない碗である。C-a型やB-b型碗、C-b型、C'-b型碗、E-b型碗は最初から装飾技法が多く、最も加工が多く華麗な装飾碗であり、かつ施される文様も1式碗の蓮花モチーフや3、4式の区画花文で類似する。

前述した2式における輪花の急増は、文様の激減するに伴う特異な現象とも捉えられる。各類型の2式碗の流行時期において、陰刻文様は全面的に減少し、1割まで下がるが、輪花碗は全体で約1.2倍に増加した。この現象は、何らかの歴史背景や社会環境によって生み出された結果と推測される。蔡乃武氏（1997）は、10世紀前半に文様の付く青磁碗が減少する現象を、コスト削減のために行われた有意の行為であると解釈した。今回の分析では陰刻文様が減少する一方で、輪花の要素が増加することが読み取れた。輪花は固有の装飾手法でもあるが、切り込みや押し込みの技法で器面を加工する作業は陰刻文様ほど複雑ではなく、熟練度も必要としない。大量に輪花が適用された一因には、大量生産によってコストを低減する必要が生まれる時期において、陰刻文様の代わりに装飾を加えるための処置と想定されよう。

六　型式による窯詰め方式の差違

(1)　目跡の種類

越窯系青磁の底部内面、高台端部や高台内底部には、砂や白土の痕跡がつく場合がよく認められる。これらの痕跡は目跡と総称されている。目跡は、

焼成する際に重ねている碗の間や匣鉢（サヤ）との間に挟まれた窯道具の痕跡である。鄭建華氏（1997）は越窯青磁の焼成に窯詰めの方法と窯道具を分類し、点状目跡や線状目跡、輪トチン痕跡との関わりを明らかにした。以下に、その概要を記す。

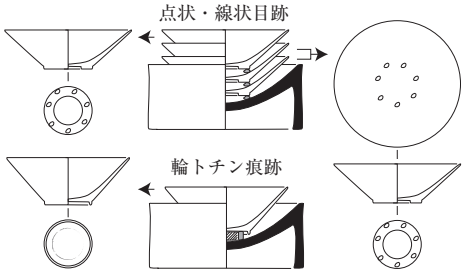


図８　重ね焼方法と目跡出現位置の関連性

越窯系青磁碗の焼成には、釉が熔けて青磁碗と匣鉢が溶着する状況を避けるため、碗と匣鉢の間で、スペースを空けるように、碗の外底部または高台端部の直下に窯道具として粘土の小塊を置く。焼成し上がってから取り外す時に残した痕跡はすなわち点状目跡である。重ね焼きをする時に、粘土塊を碗の見込みに置いてから、他の碗を小粘土塊の上に載せるようにする。したがって、一番上の碗は上に何も載せないため、碗の内底部に目跡をつけず、碗の外部だけに痕跡が残ることになる。一方、下に重ねられる碗は、内面の見込みと外底部、高台端部に残る（図8）。線状目跡も点状目跡と同様な成因で残った痕跡であるが、粘土を細長い線状にして使うので、点状ではなく線状の痕跡になる。

輪トチンも窯道具として使われていたが、便宜的に使う粘土塊ではなく、丁寧にドーナツ状に作られたもので、高台内側の平坦部の下に置き、他の碗と重ねるか、匣鉢と隔離する。ただし、輪トチンも粘土塊であるため、直接載せると碗との接触面積が多くなってしまい、痕跡を高台内部に隠すことができるとはいえ、釉薬が溶けて溶着する可能性がある。したがって、前述した点状や線状の粘土塊を、輪トチンと碗の底部の間に置いて隔離する場合もある。この方法は粘土塊ほど便利ではないが、輪トチンの高さによって間隔距離が増加して溶着する失敗率を軽減でき、しかも輪トチンの径は高台より小さいため、輪トチンの環状痕跡が高台の内側に残り、見た目をきれいに保

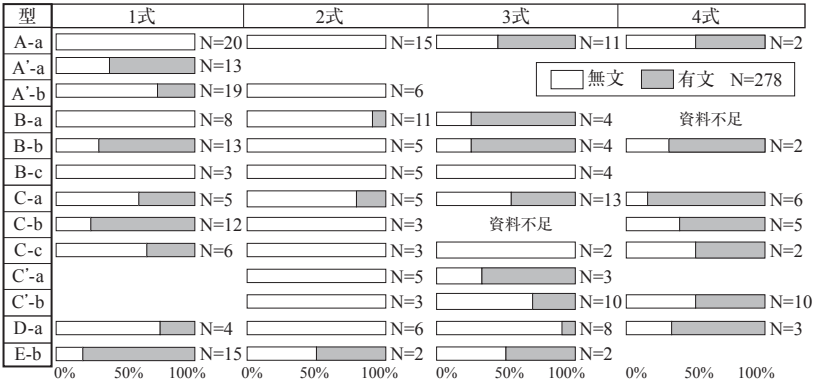


図９　各型式における無文対有文比

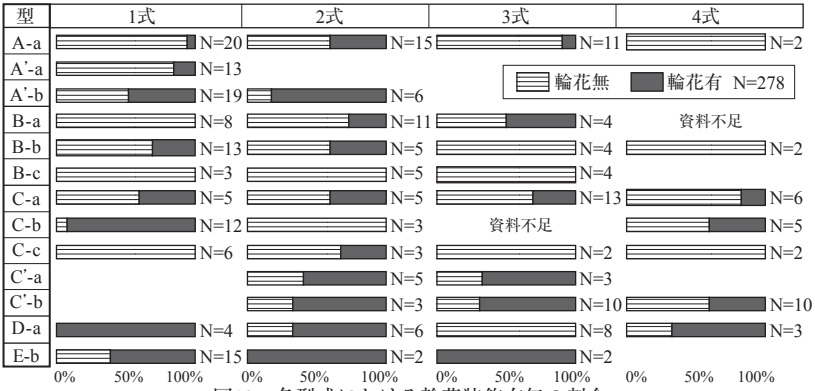


図10　各型式における輪花装飾有無の割合

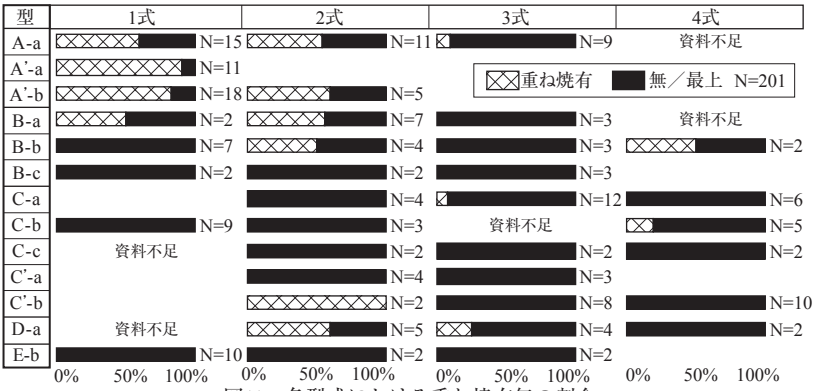


図11　各型式における重ね焼有無の割合

つ効果がある。

この輪トチンは、2式から使用の端緒が開かれるが、3式以降に多用される。3式碗は施文比率の高さからみても、より手間をかけた高級品志向が窺われよう。

(2) 重ね焼きからみる生産のコスト差

目跡の観察できる位置を考えてみると、内面と底部に同時に目跡が認められる場合には、重ね焼きの可能性が十分考えられるが、底部だけに見える場合には単独焼成で匣鉢との間に窯道具を入れて焼かれたか、あるいは重ね焼で積み上げた碗の一番上に位置した可能性がある（図8）。

重ね焼きは一回の焼成で大量に生産することを可能にし、燃料や時間を節減することで、生産コストを下げる方法である。しかし重ね焼きが行われると、内面見込みに必ず目跡の痕跡が残り、器面の完整性を損なうことになる。したがって目跡の痕跡を残してでも重ね焼きを行うのは、器物の美しさより、生産コストを重視しているとみなすことができる。生産コストを低減する商業品は、上級品指向のものとは言い難いであろう。

このことから、内面見込みに目跡が残る碗の種類を検討すると（図11）、A-a型、A'-a型、A'-b型、B-a型碗が挙げられる。外反口縁をもつ各類型碗は前述のように、文様と輪花が大半に施されるタイプであるが、C-b型とE-b型は基本重ね焼きが認められないのに対し、B-b型は2式から重ね焼が多くなるに対し、C'-b型は3式から重ね焼が少なくなり、さらにA'-b型碗は内面見込みに目跡が認められるのがほとんどである。B-b型とC'-b型は目跡が判別できる個体数が少なくて判断が難しいが、A'-b型碗は例が多く、装飾碗の中でも、上級品指向のものと日用品・商業大量生産指向のものに分けられていたことが分かる。

全体からみると、2式碗において重ね焼割合の増加が明瞭である。この点からしても、前述した文様の激減などコストを低減する傾向の論点とは一致している。

他に特筆したいのは、重ね焼き状況が多いと述べたA-a型1式である。こ

の型式には輪花や文様などの装飾技法もほとんど施されていない。すなわち、生産過程にかかるコストがかなり少ないタイプの碗であり、当時の生産者にとって価値が低かった可能性が十分に考えられる。一方、本論で分類したA-a型1式碗は、山本編年のI-1類、森編年の玉壁高台碗等、多くの研究者が論じた蛇ノ目高台碗を含んでいる（亀井2014、森2015）。これまでの分類研究では、このタイプの碗は青磁碗の中でも上級品として位置付けられ、日本では珍重されていたと一般的に想定されている（森2000、亀井2014）。しかし、上記の点からも必ずしも単純に上級品とみなすことはできないだろう。

七　型式にみられる諸特徴の再整理

本稿では、越窯系青磁碗の器形に着目して細かく分類し、その形態の変化、年代観、装飾や重ね焼きの様相について、生産地の資料を用いて分析を行った。それにより型式間の類似性が認められるものを括りだし、それらを生産コストが低いと想定されるものから巡に並べると表1のようになる。

このうち⑥の外反口縁碗は、形態上の類似性があり、法量と製作の精緻度も一致する。一方、形態も⑥と類似性を持つ③に関しては、口径が16cm以上になるサイズが大きい粗製品をA’-a型、A’-b型、小さい精製品をB-b型、C-b型、C’-b型に区分できる（図6－⑤⑥）。また、⑤の直口碗と⑥の外反碗は、形態上で差があるが、法量と製作の精緻度と文様の近似性から、何らかの関連性があると考えられる。

型式によってややバラエティーも認められるが、各類型について単純に文様、輪花、重ね焼きの状況を合わせて考えると（図9－11）、生産コストが最も高いのは輪花と文様の両方が施され、重ね焼があまり行われていないB-b型、C-b型、C’-b型、E-b型の外反口縁碗、および装飾碗の系譜を引き続けるC-a型とC’-a型碗である。次に文様と輪花が施される例はわずかしかないが、内湾口縁を持ち、形状的に重ね焼できないB-c型とC-c型碗は、その次になると思われる。そして、文様や輪花を施すが、文様がより簡単な略蓮

表１　型式特徴から考えた生産コストのレベル

	型	器形特徴	文様	輪花	重ね焼
①	A-a型、B-a型	扁平、直口	少	少	多
②	D-a型	扁平、直口、腰折れが明確	少	多	多
③	A’-a型、A’-b型	直線器壁	有	有	多
④	B-c型、C-c型	弧線器壁、内湾口縁	少	少	無
⑤	C-a型、C’-a型	弧線器壁、直口	有	有	少
⑥	B-b型、C-b型、C’-b型	弧線器壁、外反口縁	多	多	少
⑦	E-b型	屈曲外反	多	多	無

花文が多く、かつ重ね焼きで焼かれたA’-a型、A’-b型碗は生産コストがなおやや低くなる。その次に、D-a型碗は文様が少ないが、輪花碗が多く、重ね焼もD-a型２式以外にあまり行われていないことから、D-a型碗はコストが最も低いとは考えにくい。そして、越窯系青磁の全体様相からみると、生産コストが最も低いものは、やはりA-a型とB-a型碗である。ただ、生産の当初はあまり装飾がされないが、新段階になると文様が増えてくる。

先にも触れたように、A-a型では、生産者側から高い価値性を想定しにくいが、消費者側で上級品として受容される状況にあり、そこにはいくつかの背景が推測できる。例えば、生産者にとって上級品であるものは値段が高く、消費者がそれを入手できない状況が考えられる。また、消費者が自らの好みで行った選択行為の結果なども想定すべきである。生産者側にとってハイコストの型式について、器形や装飾にどんな意義付けがされていたか、そのような各型式がどのように消費地の社会体系に取り込まれていたかなどの課題も含め、今後日本での出土状況と合わせて検討したい。

八　結　語

本稿では、器形要素を踏まえて新たな型式細分と諸属性からの検討を試みた。それらの型式間には体部形状や口縁形態だけでなく、器高と口径の割合差など法量的な差もあるため、その型式に適する機能も異なるものと考えら

れる。また、各型式において文様・輪花・窯詰め方法の状況も明らかにし、生産コストの格差などを考えた。さらに、各型式碗の近似性によって類型化することにより、型式間の相互関係についての評価も与えてみた。

型式変化を概観すると、10世紀に入る前後から各型式に共通する器高の変化・輪花増加と文様の減少、そして10世紀中葉から文様の激増・多様化と型式を越えた共有、製作技法の変化も確認できる。その背景は様々に考えられるが、中国での政治状況をみると、10世紀初めに中国では唐が終焉を迎え、越窯付近では五代の呉越政権に転換し、また10世紀中期もおおよそ呉越から宋代への転換期にあたる。この段階の政局変動からの影響が、装飾技法や生産状況にも想定できるのではなかろうか。

各型式の詳しい年代観やそれらの画期については、紙幅のために十分に論じられなかったが、中国の紀年墓出土品や年銘を持つ資料を用い、出土層位関係が明瞭な資料および沈船からの出土品とも対照しながら、別稿で論じたい。次の課題としては、各型式の生産コストや形態差・容量差から導かれる機能や価値意識、視覚効果が、消費地においてどのように反映しているかを、中国・日本での分布状況差や出土遺跡の性格差から分析する必要があり、その点は海外貿易の実像を解明する手かがりになるはずである。

謝辞　本稿の作成にあたり、高橋照彦教授、福永伸哉教授、中久保辰夫助教より多くの指導を賜りました。また、肥田翔子氏、笠原七彩氏、林姿瑩氏からは日本語の文章表現についてご協力いただき、研究室の同輩、後輩の方々にも様々な助言をいただきました。資料調査においては、太宰府市教育委員会、中国の慈渓市文物管理委員会にご対応いただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

［注］

1）　本論で使う「越窯」の用語は実質的に日本において従来「越州窯」と呼ばれるものと同様である。この用語を採用する理由は別稿（盧 2017）に詳しく述べたので、参照願いたい。
2）　中国研究で盤と呼称しているが、皿の意味と同等であるため、本文では便宜上、中国研究における「盤」を皿と変換する。
3）　坏とみなされてきた形態のものを器形の特徴によって一型式として独立させ、学界に新たな知見が示された時に改めて議論できるような形にして分類しておく。
4）　以下で論述する型式間の差は、あくまで公表された窯跡などの発掘調査によって分析した結果である。報告された遺物が全体様相を現していることを前提とする。今後は、消費遺跡での出土資料を用いて、この型式区分とそれぞれ観察できた特徴についても検討を加えて修正していくことを、今後の課題としたい。

［参考文献］

池崎譲二・森本朝子　1983「福岡市立歴史資料館所蔵の高野コレクション」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書（3）』福岡市教育委員会、福岡：pp.77-106
黄秀純、傅公鉞　1984「遼韓佚墓発掘報告」『考古学報』1984（3）　文物出版社、北京：pp.361-381
亀井明徳　1975「日本出土の越州窯陶磁の諸問題」『九州歴史資料館研究論集』1　九州歴史資料館、福岡：pp.51-97
亀井明徳　1983「初期輸入陶磁器の受容構造の特質」『九州歴史資料館 10 周年記念・太宰府古文化論叢（下巻）』吉川弘文館、東京：pp.421-458
康　才媛　2011『唐代越窯青磁研究』花木蘭文化出版社、台北
杭州市文物考古所、臨安市文物館　2000「浙江臨安五代呉越国康陵発掘簡報」『文物』2000（2）　文物出版社、北京：pp.4-34
謝　純龍　2002『上林湖越窯』科学出版社、北京
浙江省文物考古研究所、慈溪市文物管理委員会　2001「浙江慈渓市越窯石馬弄窯址的発掘」『考古』2001（10）　考古雑誌社、北京：pp.59-72
浙江省文物考古研究所ほか　2002『寺龍口越窯址』文物出版社、北京
浙江省文物考古研究所・慈溪市文物管理委員会　2003「慈溪上林湖荷花芯窯址発掘簡報」『文物』2003（11）　文物出版社、北京：pp.4-25

浙江省文物考古研究所・温州市文物保護考古所・永嘉県文化館　2012「浙江永嘉竜下唐代青瓷窯址発掘簡報」『文物』2012（11）　文物出版社、北京：pp.16-36
田中克子　1994「北部九州における越窯系青磁粗製品について―鴻臚館跡出土遺物を中心として―」『先史学・考古学論究』龍田考古会、熊本：pp.169-196
鎮江博物館　1985「江蘇鎮江唐墓」『考古』1985（2）　考古雑誌社、北京：pp.131-148
土橋理子　1993「日本出土の古代中国陶磁」『貿易陶磁　奈良・平安の中国陶磁』臨川書店、京都：pp.211-250
中国社会科学院考古研究所河南二隊　1996「河南偃師市杏園村唐墓的発掘」『考古』1996（12）　考古雑誌社、北京：pp.1-24
鄭　建華　1997「越窯焼造工芸的初歩総結」『東方博物』2　浙江大学出版社、浙江：pp.88-95
森田　勉　1979「毛彫文様のある二・三の青磁について」『古文化談叢』6　九州古文化研究会、福岡：pp.169-176
森田　勉　1982「北九州地方から出土する越州窯青磁の様相」『考古学ジャーナル』211　ニュー・サイエンス社、東京：pp.15-21
森　達也　2015『中国青瓷の研究：編年と流通』汲古書院、東京
北京市文物工作隊　1962「北京南郊遼趙德鈞墓」『考古』1962（5）　考古雑誌社、北京：pp.246-253
內蒙古文物考古研究所　1987「遼陳國公主駙馬合葬墓發掘簡報」『文物』1987（11）　文物出版社、北京：pp.4-24
寧波市文物考古研究所　1997「浙江寧波和義路遺址発掘報告」『東方博物』1　浙江大学出版社、浙江：pp.243-280
山本信夫　1995「北宋期越州窯系青磁の検討」『大宰府陶磁器研究―森田勉氏追悼論文集―』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会、太宰府：pp.181-197
山本信夫　2000『大宰府条坊跡XV』太宰府市教育委員会、太宰府
横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料館研究論集』4　九州歴史資料館、福岡：pp.1-26
洛陽市文物工作隊　1995「洛陽後梁高繼蟾墓發掘簡報」『文物』1995（8）　文物出版社、北京：pp.52-61
盧　柔君　2017「越窯系青磁碗の型式学的再検討」『待兼山考古学論集Ⅲ　大阪大学考古学研究室30周年記念論集』大阪大学考古学友の会、大阪

（大学院博士後期課程学生）

摘要

越窯系青磁碗的基礎研究
―器形・屬性・紋飾與燒成方法詳論―

盧　柔　君

關鍵字：貿易陶瓷、類型学分類、晚唐、吳越、北宋

9～11世紀的陶瓷開始轉變為國際貿易商品，其生產、流通與消費，與作為貿易主體的社會文化習習相關，容易反映出各種體制與文化的變遷。因此，研究陶瓷在各種層面上如何被賦予意義，有助於釐清此一時期靜態的斷片與動態的變化過程。

過去日本研究者曾對此一時期的越窯系青瓷多所探討，對其編年與分類已有詳盡的觀察。然而這些研究主要基於對高級品的關心，將陶瓷視為代表財富與權力的舶來品，因此分類的編定多為探討精製品與粗製品的區辨方式，以及各自的分布狀況。

事實上，陶瓷除了精美的外觀，同時也是實用性的器物。越窯系青瓷中，不只有精粗製品之分，更有多樣化的器種、器形。這些器形差異，不只是反映著功能上的不同。由於一種功能可由多種器形達成，人們可能使用不同器形來滿足特定需求，因此器形差異也同時反映出文化上的偏好。

雖有部份中日研究者已開始關注器形差異及其歷時性的變化，但尚未有明確的分類可用於探討生產者、消費者對於各類器物的認識、使用與觀感。

因此，本文將根據器形對生產地出土的越窯系青瓷進行系統化的分類，並嘗試將不同類型的特徵數值化。此外，也觀察不同型式的裝飾手法、裝燒方式有何異同，推論各種型式在生產成本上的差異。本文所統整的型式分類，將作為未來的研究基礎，討論不同型式的分布狀況與變化，祈能使這一時期生產地與消費地的社會文化圖象更加清晰。